

十七条憲法釈義

憲法十七條釈義

一に曰く、和を以て貴しとなし、忤^{しか}ふこと無きを宗^{むね}となせ。人皆^{みな}党^{たう}有り、亦^{また}達^{たつ}れる者少なし。是を以て或は君父に順はず、乍^{また}（たちまち、また）隣里に達ふ。然れども上和らぎ下睦^{むつ}びて、事を論^{わづら}ふに諧^{かな}ひぬるときは、則ち事理^{おのず}自ら通ず。何事か成らざらむ。

「和を以て貴しとなす」

「論語・学而第一の十二」に曰く、「有子曰く、礼の用は和を貴しと為す。先王の道も斯れを美と為す。（中略）和を知りて和すれども礼を以てこれを節せざれば、亦行わるべからず」と。「和」は「やわらぐ」で、羣卿百寮が調和・協和することであるが、節度ある「礼」を伴ってこそ付和雷同に陥らない。故に「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」（子路第十三の二十三）。「春秋左氏伝」（昭公二十年）に斉の景公と晏子の「和同の弁」の挿話がある。一 狩から帰った斉の景公が宰相・晏子に言うには、「抛という男だけがわしと和するわい」と。すると晏子は答えた。「抛などという男はせいぜい「同」がいいところ。とても「和」とは申せません」と。景公不思議に思い、「和と同とは違うものか」と問いただした。晏子曰く、「和」というのはスープを作ることで譬えれば、水と火、酢や塩や梅等を用いて魚肉をぐずぐず煮込み、調理人がこれを塩梅します。味が濃ければ薄め、足りなければ味を加えます。君臣の関係もこれと同じです。君がよしとされても不可なる点があれば進言して、君がよしとされることを成就するようにし、君が不可としてもよき点あらば進言して、君の不可とされることを可に変える、かくして政治は妥当を得るのです。今、抛という男は何にでもイエスマンです。それでは料理に水だけを加え、音楽の演奏にハーモニーが生まれないのと同じです。異質を巧みに調和するを「和」というのであって、付和雷同の「同」と混同なされませぬように」と。

● 「忤^{しか}ふこと無きを宗^{むね}となせ」

「忤^{しか}ふこと」とは人と争い、逆らうこと。「正法眼蔵菩提薩埵四攝法」に、「怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。（中略）愛語は愛心より起こる、愛心は慈心を種子とせり。愛語よく廻天のちからあることを学すべし」、とある。羣卿百寮は、和言愛語を以て、お互い嫉妬せず、輔弼しあって一致協力するを宗とせよ。

● 「人皆^{みな}党^{たう}有り」

「周易（乾・文言伝）」に「子曰く、同声相應じ、同氣相求む。水は湿に流れ、火は燥に就く。雲は竜に従い、風は虎に従う、と。（君子には君子の小人には小人の仲間あり。人はそれぞれの類に従う）」「類は類を呼ぶ」「子曰く、人の過つや、各々其の党に於いてす。過を觀て斯に仁を知る」（里仁第四の七）「書經・洪範」に曰く、「偏無く党無く、王道蕩蕩。党無く偏無く、王道平平たり」。そうありがたいもの。

● 「達するもの少」の「達」。

「顔淵第十二の二十」に「それ達なる者は、質直にして義を好み、言を察して色を觀、慮つ

て以て人に下る」とある。表面上は仁者で、行いの違うものは「聞^{きこ}なる者」と言う。

● 「隣里」とは。

家が5軒あるをを隣、5隣則ち25軒あるを里という。「雍也第六」に、「原思(原憲)、これが宰たり、これに粟九百を与う。辞す。子曰く、なかれ、以て爾が隣里郷党に与えんか」、と。一 弟子の原思が家宰就任に際し、粟九百を持たせようとしたら、原思が断ったので、孔子は隣近所にやりなさい、と言った。「隣里」は向こう三軒両隣り。

● 「上和らぎ下睦びて」

上下交々和合・好合すること。「孟子」(離婁下三)に「孟子齊の宣王に告げて曰く、君の臣を視ること手足の如くなれば、則ち臣の君を視ること腹心の如し。一犬馬の如くならば、国人(無関係な路傍の人)の如し」、とある。又、「八佾第三のの十九」に、「子曰く、君、臣を使うに礼を以てし、臣、君に事うるに忠を以てす」、とある。和睦にもルールあり。

● 「事を論^{あづから}ふに諧^{あは}ひぬる」

上下議論をして、問題を共有化し、意見の一致をみること。「春秋左氏伝」(襄公三十一年)鄭の子産が、郷校を毀^こたず、人々に自由に執政の善否を議論させた事例あり(後述する第十七条参照)。「中庸」(章句第六章)に、「舜はそれ大知なるかな。舜は問うことを好み、遁言を察するを好み、悪を隠し善を揚げ、其の両端を執りて、其の中を民に用ゆ」とある。

二に曰く、篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり。則ち四生の終帰、万国の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざらむ。人尤^{ひと}(はなはだ、もっとも)悪きもの鮮^{すくな}し。能く教ふれば従ふ。其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉^{かたが}れるを直さむ。

● 「三宝とは仏法僧なり」

真宗の僧・大韓の「十七か条憲法の事」に面白い喩えでこれを説明してある。曰く、「仏は名医に比し、法は薬に似たり、僧は看病人なり」、と。

● 「四生(しせい)の終帰、万国の極宗なり」

「四生」とは、衆生の生まれ方に四種類の区別があるとする仏教観で、「胎生」には人間や獣、「卵生」に鳥類、「湿生」に虫類、「化生」には天人など。(「般若経」) 仏法曹の威力が、帰するところ衆生たるものの護持すべき極め付きの教えなり、というのである。

● 「人尤^{ひと}(はなはだ、もっとも)悪きもの鮮^{すくな}し」

生まれつき甚だしき悪人はいない。「孟子」(告子篇上の二)に、「孟子曰く、人の性の善なるは、猶水の下きに就くが如し。人善ならざるあるなく、水下らざるあるなし」、と。(性善説) 一方で「荀子」に、「人の性は悪なり、其の善なるは偽(人為)なり」(性悪篇)とある。が、これも礼という人為で善になるという意味であるから、「陽貨第十七の二」に、「子曰く、性、相い近し。習えば、相遠し」とあるのを容認してよいだろう。「法句経」に曰く、「ただ一向にそしらるる 唯一向にほめらるる かかるもの 過ぎ行きし日にはあらざりき 今もまたあらざるなり やがて来ん日にもあることなからん(二二八)」

● 「能く教ふれば従ふ」

「教えありて類なし」(衛霊公第十五の三十九)。人はきちんと教えさえすれば理解し従うもの。但し、「子曰く、唯だ上知と下愚とは移らず」(陽貨第十七の三)。上知則ち天才と、下愚則ち困っても学ぼうとしない輩は変わらない。

● 「其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉れるを直さむ」

仏法僧の如き優れた規矩準繩に依ら無くては、不善のものたちを善に導くことができようか、できない、と。

三に曰く、詔を承けては必ず謹め。君は則ち天なり、臣は則ち地なり。天覆ひ地載せて、四時順行し、万氣通ふことを得。地、天を覆はんと欲せば、則ち^{やぶ}壤れを致さんのみ。是を以て君言へば臣承け、上行えば下靡く。故に詔を承けては必ず謹め。謹まずんば自ら敗れむ。

● 「詔を承けては必ず謹め。君は則ち天なり、臣は則ち地なり」

羣卿百寮たるものは、詔勅を謹んで受け、実行せよ。「君は則ち天なり、臣は則ち地なり」は、「周易繫辭上傳」にある「天は尊く地は卑しくして、乾坤定まる。卑高以て陳なりて、貴賤位す」等の易の思想を人間社会に敷衍したもの。「管子」に曰く、「君臣は天地の位なり」と。

● 「天覆ひ地載せて(天覆地載)」

宇宙の森羅万象を包含した表現で、「中庸」に「天の覆う所、地の載する所」(第三十二章)、とある。

● 「四時順行し」

「陽貨第十七の十九」に、「子曰く、天何をか言うや。四時 行われ、百物生ず。天何をか言うや」、と。声もなく臭いもなく且つ間断なく自然は順行している。

● 「上行えば下靡く」

下のものは上のものに影響されやすく、物事の成就も上次第。「顔淵第十二の十九」に、「君子の徳は風なり、小人の徳は草なり。草、これに風を上(加)うれば、必ず偃(伏)す」、と。又、「説苑」に曰く、之れ下を化すは猶風草を靡かすごとし、と。「韓非子・外儲説」に、「斉の桓公紫を服すを好む。一国 ^{ことごと} 紫を服す。又、「後漢書」に曰く、「楚王細腰を好む。宮中餓死するもの多し」、と。「堯舜天下を師いるに仁を以てして、民之に従う。桀紂天下を師いるに暴を以てして、民之に従う」(「大学」)

四に曰く、羣卿百寮、礼を以て本とせよ。其れ民を治むるの本は、^{かなら}要ず礼に在り。上礼ならざれば下 ^{ととの} 齊はず。下礼無ければ以て必ず罪有り。是を以て羣臣礼あれば、位次乱れず。

百姓礼あれば、国家自ら治まる。

● 「礼を以て本とせよ」

「礼」とは、「主として冠婚葬祭その他の儀式のさだめをいう。社会的な身分に応じた差別をするとともに、それによって社会的な調和をめざすのである」・「法律と対してそれほど厳しくはない慣習的な規範」訳注（金谷治「論語」岩波文庫）。いずれをも指す。「孝経」（広要道章）に曰く、「上を安んじ、民を治むるは、礼より善きはなし。礼は敬のみ」、と。

● 「上礼ならざれば下^と齊はず」

「八佾第三の十九」に「子曰く、君、臣を使うに礼を以てし、臣、君に事うるに忠を以てす」、とある。又、「為政第二の三」に、「これを道びくに徳を以てし、これを齊うるに礼を以てすれば、恥ありて且つ格し」、と。法制禁令を厳しくし、刑罰で統制しようとするれば、法の網をくぐるものが出来たものは心から恥じることがない。上のものが徳を以て導き、「敬」を伴った礼で対すれば、自ずから下のものに恥心が生じ、かつ正しくなる。

● 「下礼無ければ以て必ず罪有り」

「余桃の罪」という慣用句がある。「韓非子・説難篇」にある、次の話が出典である。かつて衛の弥子瑕は衛君に寵愛された。当時君主の車に勝手に乗ったものは肢きりの刑に処せられた。たまたま弥子瑕の母親が病気になった。弥子瑕は君命と偽り、君の車を走らせて見舞いに出かけた。衛君は其の知らせを受けると、何と孝行者よ、と賞賛した。又あるとき、弥子瑕と衛君が果樹園で遊び、桃が美味かったので衛君に食べかけの桃を半分食べた。衛君は美味なる桃を分けてくれた弥子瑕を愛しく思った。しかし、容姿衰え、寵愛が薄れるに及んで、君のお咎めを蒙ることになる。衛君曰く、「こいつはかつて、わしの命じゃと偽ってわしの車に乗ったことがある。又、食べ残しの桃をわしに食べさせた」、と。俗諺に「親しき中にも礼儀あり」。

● 「是を以て羣臣礼あれば、位次乱れず。百姓礼あれば、国家自ら治まる」

五に曰く、^{いふ}養を断ち欲を棄て、明らかに訴訟^{さだ}を弁めよ。其れ百姓の訟は一日に千事あり、一日すら尚ほ^{しか}爾り、況や歳を累^{かさ}をやをやぬる。頃（このごろ）訟を治むる者、利を得るを常となし、^{まいない}賄を見て讞（ことわり）を聴く。便ち、財有る者の訟は、石を水に投ずるが如く、乏しき者の訴は、水を石に投ずるに似たり。是を以て貧しき民は、則ち由る所を知らず。臣道も亦焉（ここ）においてか闕けむ。

● 「養^{いふ}を断ち欲を棄て」の養は食を食ること、欲は名利私欲のこと。酒・色・財は三欲

● 「明らかに訴訟^{さだ}を弁めよ」。「顔淵第十二の十二」に、「子曰く、片言以て獄（訴え）を折（さだ）むべき者は、それ由なるか。子路、諾を宿（とど）むること無し」、と。

● 「財有る者の訟は、石を水に投ずるが如く、乏しき者の訴は、水を石に投ずるに似たり」

の出典は、「文選」の「運命論」(季 蕭遠)からの引用 — ここでは、金持ちは金力で簡単に通り、貧乏人は賂がないため、一向に裁判が進展しない、の意味。

「張良、(神人) 黄石の符を受け、三略の説を誦し、以て羣雄に遊ぶ。其の言うや水を以て石に投ずるが如し。之を受くるなきなり。其の漢祖に遭うに及び、其の言うや石を以て水に投ずるが如し。之に逆らうなきなり。張良の陳項(陳渉、項羽)に拙説して、沛公に巧言するにあらざるなり」

六に曰く、悪を懲らし善を勧むるは、古の良典なり。是を以て人の善を匿すことなく、悪を見ては必ず匡せ。其れ諂ひ^{いつわ}詐る者は、則ち国家を覆すの利器たり、人民を絶つ^きの鋒剣たり。亦佞り媚ぶる者は、上に対ひては則ち好んで下の過を説き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗す。其れ此の如き人は、皆君に忠無く、民に仁無し。是れ大乱の本なり。

●「悪を懲らし善を勧むる」 — 「春秋左氏伝」成公14年(鄢陵の戦いの2年前)

「経文」・・・①秋、(魯の宣伯)叔孫僑如、齊に如き女を逆^{さか}ふ。

②九月、僑如、夫人婦姜氏を以て齊より至る。

「伝」 秋、宣伯(叔孫僑如)が公女を迎えに齊に赴いた。経文に「叔孫僑如」と族名も記録されているのは、国君の命であることを尊重したのである。

九月、叔孫僑如が夫人姜氏を伴って、齊から帰国した。経文に「叔孫」の族名が省かれているのは、夫人を尊重したのである。

故に君子曰く、「春秋の称(呼称=物の呼び方)は、微にして(義は)顯なり、志(しる)して晦^{くも}し(義がくらくて知りがたい)。婉(曲な言葉を用い)にして(文)章を成し、盡して汙^きげず。悪を懲らして善を勧む。聖人に非ずんば、誰か能く之を修めん」、と。

● 「人の善を匿すことなく、悪を見ては必ず匡せ」。「懲悪」の例は、湯王が夏の桀王を、武王が殷の紂王を滅ぼしたことなど。又、敷衍して「匡す」を解釈すれば、「大学」に曰く、「子曰く、訟を聴くは吾れ猶人のごときなり。必ずや訟無からしめんや、と」、の如く悪を為さしめないことが根本儀であろう。「中庸」に曰く、「「(舜は) 悪を隠して善を揚げ」た、と。「顔淵第十二の十六」に、「子曰く、君子は人の美を成し、人の悪を成さず。小人は是に反す」とあり。

● 「其れ諂ひ^{いつわ}詐る者は、則ち国家を覆すの利器たり」。秦の始皇帝没後、政治の実権を握った宦官出身の丞相・趙高の「鹿を謂いて馬と為す」故事が「史記」にある。君に対しても言うべきは言わねばならない。「憲問第十四の二十三」に、「子路、事えんことを問う。子曰く、欺くこと勿れ。而してこれを犯せ」、と。「孝経」に曰く、「天子、諸侯、大夫に争臣がいて、父に争子あれば、身不義に陥らず」(諫諍章)と。

● 「佞り媚ぶる者は、上に対ひては則ち好んで下の過を説き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗す」。「論語・陽貨第十七の二十四」に、「子貢問いて曰く、君子も亦た惡むこと有

りや。子曰く、惡むこと有り。人の惡を稱する者を惡む。下に居て上を訕る者を惡む」。又、「中庸」に曰く、「上位に在りては下を陵がず、下位に在りては上を援かず」、と。

七に曰く、人各々任有り。掌ること宜しく濫れざるべし。其れ賢哲官に任ずるときは、頌音（しょうおん）則ち起こり、奸者官を有つときは、禍乱則ち繁し。世に生まれながらにして知るもの少なし、尅く念ひて聖となる。事大小と無く、人を得て必ず治まり、時急緩と無く、賢に遭ふて自ら^{めづ}なり。此に因りて国家永久にして、社稷危きことなし。故に古の聖王は、官の為に以て人を求め、人の為に官を求めたまはず。

●「人各々任有り。掌ること宜しく濫れざるべし」。「春秋左氏伝（成公十六年）」。「鄢陵の戦いで、進軍中にぬかるみがあって、晉の厲公の乗った兵車がそれに落ち込んだ。中軍の総帥の欒書が厲公を自分の兵車に移らせようとした。息子の欒鍼が押し止めて曰く、「書（父よ）、退け。国に大任あり。なんぞこれを専らにするを得ん。かつ官を侵すは冒（洩）なり。官を失うは漫なり」、と。父を退け、自分が厲公の車をぬかるみから引きだした。

●「其れ賢哲官に任ずるときは、頌音（しょうおん）則ち起こり」。

「春秋左氏伝」に鄭の哲人宰相・子産の治世を称して曰く、

く子産が就任して、政に従うこと一年にして、輿人（大勢の人たち）之を誦して曰く、我が衣冠を取りて之を褚（蓄）へしめ、我が田疇を取りて之を伍にす。孰れか子産を殺さん。

吾其れ之に与せん、と。（奢侈を禁じ、相互扶助で税を課したのを非難した。）

三年に及びて、又之を誦して曰く、我に子弟あり、子産之を誨う。我に田疇あり、子産之を殖（増や）す。子産にして死せば、誰か其れ之を嗣がん、と。（子産を絶賛した。）

●「世に生まれながらにして知るもの少なし」。聖人孔子でさえ、「我は生まれながらにしてこれを知る者に非ず。古を好み、敏にして以てこれを求めたる者なり」（述而第七の十九）と言っている。

●「尅く^{おも}念ひて聖となる」。「中庸」に曰く、「博学・審問・慎思・明弁・篤行を、（中略）人一たびして之を能くすれば、己之を百たびす。人十たびして之を能くすれば、己之を千たびす。果たして此の道を能くすれば、愚と雖も必ず明に、柔と雖も必ず強し」、と。

●「事大小と無く、人を得て必ず治まり」。「中庸」に曰く、「其の人存すれば則ち其の政挙がり、其の人亡すれば則ち其の政息む。（中略）故に政を為すは人に在り」、と。日頃人を求めて、外部から賢能をスカウトするだけでなく、百年の計を以て、人材育成していくことが重要。「管子」に曰く、「一年の計は、穀を樹うるに如くはなく、十年の計は、木を樹うるに如くはなく、終身の計は、人を樹うるに如くはなし」（權修篇）、と。

●「古の聖王は、官の為に以て人を求め、人の為に官を求めたまはず」。太公望呂尚は、人を求めてやまない文王が、狩りをする前に占った卜筮の言通り、渭水で文王に見出され、政事や軍事に秘策を用い、周の基礎固めを輔弼した（史記・齊太公世家）。漢の高祖・劉備

玄德は三顧の礼を以て、臥竜・諸葛孔明を迎え軍師に迎えた（三国志・蜀書）。

八に曰く、羣卿百寮、早く朝し^{あは}く退け。公事^{きこと}鹽（もろ）きこと靡^なし。終日も蓋し難し。是を以て遅く朝せば急なるに速^{はや}ばず、早く退けば必ず事蓋さず。

●「早く朝し^{あは}く退け」。明末の儒者・呂坤（新吾）の「呻吟語」に、「官となるは、すべてこれ苦事、官となるはもとこれ苦人。官職高きこと一步なれば、責任すなわち大なること一步。憂勤すなわち増すこと一步なり」とある如く、すべて上位者ほど責任は重い。古くは夏王朝の禹王。父親・鯀が洪水を治めることが出来ず、誅罰を受けたのを傷み、身を勞し思いを焦がし、外に居ること十三年。家門を過ぐれども、敢えて入らず。遂に成功して天下を平治した（史記・夏本紀）。「礼記・玉藻篇」に、群臣は、朝早く、物の色が見え始める頃には内朝し、君の出御を待ち、君は日の出る頃出勤する」、とある。上位者は、以て下位者の三倍勤勞すべし。又、仕事を効果的、且つ遺漏なきようにする為には、一日でのやるべき仕事の時間区分を明確にしておくことも重要である。鄭の子産は使節として、晉の平公を見舞い、大夫の叔向に言った。「君子に四時あり。朝は以て政を聴き（朝廷に出て、政を聴く。政務を処理する）、晝は以て訪問し（会議して可否を問う。会して事を臣下に問う）、夕は以て令を修め（独居して政令を省み、更改する）、夜は以て身を安んず（淫に耽らず休養する）。一これが乱れると心迷って、万事が乱れる。晉公はこれが乱れて御病氣になっておられるようだ」、と。（「春秋左氏伝」昭公元年）単に遅くまで居ればよい、というものではない。

●「公事鹽（もろ）きこと靡^なし。終日も蓋し難し」。出典は、「詩經・唐風（鴇羽）」に、「王事鹽（もろ）きこと靡^なし」、とあるによる。「鹽（もろ）きこと靡^なし」とは、戦争や土木工事や人事や民事等諸々の要事が頻発して、ゆるがせに出来ない、の意。周公は、「一沐三握髮、一飯三吐哺」して政治に精勵した。一 武王は、殷の紂王を放伐後、周王朝を興し天下を治めたが、早く亡くなったので、その子の成王が若くして即位した。そこで魯に封じられた武王の弟・周公が摂政として都に残り、息子の伯禽を代わりに魯侯として封じた。魯に就任に際し、周公、伯禽を戒めて曰く、「私は文王の子にして武王の弟であって、しかも成王の叔父だ。従って私は天下で賤しい身分ではない。然るに私は一たび沐浴する毎に三たびも髪を握って洗いなおし、一飯の食事の間に、食べかけの物（哺）を三度吐き出すという位忙しく訪問者と会った。それでも猶天下の賢人を見失わないかと恐れる。今、お前は魯に行くが、決して国権をかさにきて驕ることがあってはならない」、と。

九に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信有れ。其れ善惡成敗は、要^{かならず}信に在り。羣臣共に信あらば、何事か成らざらむ。羣臣信なくんば、万事悉く敗れなむ。

●「信は是れ義の本なり。事毎に信有れ」。「論語」に、「曾子曰く、吾れ日に三省す。人の

為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝えしか。(学而第一の四)」。又、「有子曰く、信、義に近づけば、言復(ふ)むべし。(学而第一の十三)」、と。人と人との交際上欠かせぬものが信、則ち、ウソをつかず、約束をキチンと守ること。義とは正しいこと。だから信が義に近づけば約束した言葉も信頼・信用できる。信と義とは表裏一体の善徳。 一番弟子の子貢が、孔子に政治の要諦を訊いた。孔子が言うには、食を十分にし、軍備を十分にし、人民に信を持たせることだ、と。子貢がもしどうしてもやむをえずに捨てるとしたら、この三つのなかでどれを先にするか、と訊くと、子曰く、「兵(軍備)を去らん」、と。あと二つのなかでやむをえず捨てるとしたら、どれを先にするか。子曰く、「食を去らん。古より皆死あり。民は信なくんば立たず」、と。人間はいつかは死ぬものと決まっている。その中で、人が人たる存在価値は社会生活において、お互いに信があるかどうかだ。これだけは捨てられない。そう断言する孔子が厳然と髭髯する。但し、「子路篇」に、子曰く、「言必ず信、行必ず果、硜硜たる小人なるかな」、とあって、こちこちの堅物では又融通が効かない、と忠告している。「莊子(盗跖)」にある、尾生という男が、女と橋の下で会う約束をしたが、女は来ず、大雨で増水しても待ち続け、遂に溺死したという所謂「尾生の信」は戴けない。「事毎に信有れ」、にも中庸が欠かせないのである。

●「羣臣共に信あらば、何事成らざらむ」。晋の文公(重耳)は「城濮の戦い」(紀元前632年)で楚を破り中原の覇者となった。躍進の蔭には子犯や趙衰といった名将達の建言を容れ、部下や民に義・信・礼の文教政策に努めたことが大きく奏功した。信に関して例示すれば、「原の戦い」で、文公は兵士たちに三日で戦いを終わらせると約束した。期限が来ると、城中から脱出した間諜が敵は落城寸前だと告げて攻撃を進言したが、「信は国の宝なり。民の庇(おお)わるる所なり。原を得るも信を失わば、何を以てか之を庇わん」、と言って引き上げた。(春秋左氏伝) 君と臣との信頼が増幅したことは言うまでもあるまい。

十に曰く、^{いかり}忿を絶ち^{いかり}瞋を棄て、人の違へるを怒らざれ。人皆心有り、心各々執るところ有り。彼是なるときは則ち我非なり。我是なるときは則ち彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、詎(なん)ぞ能く定むべけんや。相共に賢愚なること、鑊の端なきが如し。是を以て彼の人^{いかり}瞋ると雖も還って我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従って同じく^{いかり}拳(おこな)へ。

●「^{いかり}忿を絶ち^{いかり}瞋を棄て、人の違へるを怒らざれ」。子曰く、「顔回なる者あり。学を好む。怒りを遷さず」(雍也第六の三)、と。又曰く、「一朝の^{いかり}忿に其の身を忘れて以て其の親に及ぼすは、惑いに非ずや」、と。顔回の如き至聖は到底凡人に望むべくもないが、「一朝の^{いかり}忿＝一時の怒り」で、近親まで巻き添えにした、重大事件が世々勃発し続けているのは、有史以来の人間の浅はかな事実である。自己と他己のせめぎ合いがその主たる原因である。

●「人皆心有り、心各々執るところ有り」。子産曰く、「人心の同じからざるはその面の如

し」、と。百人百様の顔がある如く、それぞれ人の性格や考え方・意見は異なって当たり前の筈である。誰もが気づいていながら、「オレが、オレが」になってしまう。

- 「彼是なるときは則ち我非なり。我是なるときは則ち彼非なり」、「是非の理、詎（なん）ぞ能く定むべけんや」。「莊子」（齊物篇）に面白い話がある。大抵の連中は、毛嬙とか麗姫という女性を絶世の美人だと騒ぐが、池の魚はこれを見れば逃げてしまいうし、鹿だって一目散に走り去ってしまう。美しいとか醜いとか言っても所詮は相対的なもの。絶対的な真実などどこにもない」、と。又曰く、「今、私と君とで何か議論していたとする。第三者がそれを判定して君が正しい、としたとしよう。それは真に正しいだろうか。ただ君に同意しただけの話で、絶対的に正しいという証明にはならない。逆に私の方が正しいと判定した場合も同様だ。彼が我々二人と違う意見だった場合や、三人共同意見だった場合でも、それが絶対的に真実だと、どうして言えるだろう。つまり誰も真実など分からないのさ」、と。
- 「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ」。まさしくその通りである。それなのに我々はつまらぬことで争っている。白楽天の「酒に対す」を挙げておく。この地上に争いの絶えることなし。戦争も、出世争いも、見栄張りも、いじめも蝸牛角上のこと。くだらぬことで争うことをやめよ。

◆ 「酒に対す」

蝸牛角上 何事をか争う

石火光中 此の身を寄す

富に従い、貧に従い且つ歓楽す

口を開いて笑わざるは 是痴人

- 「相共に賢愚なること、鑿の端なきが如し」。「鑿の端なきが如し」の出典は「孫子」（勢篇）。お互い賢愚なること、あたかも丸い輪に終点がないようにどうどう巡りし、優劣決め難し、ということか。

十一に曰く、明らかに功過を察して、賞罰必ず当てよ。日者（このごろ）賞は功に在らず、罰は罪に在らず。事を執る羣卿、宜しく賞罰を明らかにすべし。

- 「明らかに功過を察して、賞罰必ず当てよ」。麗姫の禍を発端に、献公没後内乱の埒塙と化した晉が、大国としてその地歩を固めたのは、十九年間も諸国の流浪を余儀なくされ、秦の穆公に助けられて即位した文公（重耳）に始まる。文公は即位後、亡命に同行した臣下たちの論功行賞を行った。各々が自分の功績を申告し、その功により賞された。が、介子推だけは何も申し出ず、賞からももれた。介子推曰く、「献公のご子息九人が内乱を繰り返し、滅国寸前に陥りながらも、猶かつ我が君文公を即位させたのは、ひとえに天命あれ

ばこそ。なのにあたかも自分の手柄を標榜する輩たちがいるのはあきれかえったものだ。しかもその連中に賞を与える君も君だ」と。それを聞いた母親が、お前も功績があったのだから申し出たらどうか、と言ったが、介子推は、他人を批判し同列に入することは罪また甚だしい。又、君に怨言を言ったのだから禄を食むわけには参りません、と固辞したので母親もそれに従って、二人でいずこかへ隠遁してしまった。後にそれを聞き知った文公は、大いに悔やみ、探し求めたが見つからず、彼らのいたという地を祭田に指定して悔悟の標とした。褒賞も功過を察し違えると、逆効果を齎す。条文の「明らかに功過を察して、賞罰必ず当てよ」、は蓋し大事を司る者の亀鑑である。

●「日者（このごろ）賞は功に在らず、罰は罪に在らず」。「最近賞罰の適否が的を射ていない」、という聖徳太子の嘆きは、現代に於いても同様か。ここでは賄賂の横行を戒めた言辞だろう。

●「事を執る羣卿、宜しく賞罰を明らかにすべし」。名君の誉れ高き唐の太宗・李世民の「貞観」の御世のこと。貞観元年の論功行賞で、房玄齡、杜如海等が勲一等を賞された。太宗の叔父・淮安王神通が、彼らはたかが文書係り、部下を率いて戦功を立てたのはワシだ、と異議を申し立てた。太宗曰く、「国家の大事は、これ賞と罰なり。賞、その労に当たれば、功無き者自ら退く。罰、その罰に当たれば、悪をなす者ことごとく懼る。則ち賞罰の軽々しく行なうべからざるを知る」、と前置きしたあとで、「史記」（蕭相国世家）の事例を挙げて褒賞事由を説明した。曰く、「私は今、慎重に勲功を勘案して褒賞を与えた。玄齡らは、本営にあって重要な戦略を立て、建国の方策を策定してくれた。漢の高祖・劉邦が、戦闘で功を挙げた諸将を狩をする時の犬に喩え、帷幄の中で策謀した蕭何を犬の綱を解いて指図する者として第一等の褒賞を与えたが、房玄齡らの功績はそれにまさるとも劣らない。だから勲功第一とした。叔父上は私と血縁関係者です。ですから私心を以てみだりに勲臣と賞を同じくするわけにはまいりませぬ」、と。これを聞いた功臣たちは、太宗の公正さを将順し、我われも不満を漏らすまいと言った、という。「貞観政要（封建篇）」

十二に曰く、国司国造、百姓に斂すること勿れ。国に二君非ず、民に両主無し。卒土の兆民、主を以て主と為す。任ずる所の官司は、皆是れ王の臣なり。何ぞ敢えて公と共に百姓に賦斂せんや。

●「国司国造、百姓に斂すること勿れ」。「国司（こくし）」が置かれたのは、七〇一年に制定された大宝令からで、憲法制定当時にこの語が含まれるのは、後世の潤色によるとされる（岩波新書「聖徳太子」吉村武彦著）。「国司国造」を、「羣臣百寮」と思えばよい。「大学」に曰く、「魯国の賢大夫である孟献子が言うには、乗物の馬を飼う身分にもなった者は、下々と鶏・豚を飼って小利を争うな。祭礼用の氷室を持つ身分になった家老職の家柄では、牛・羊を飼わず下々から買うものだ。広い領地を有し、戦車百台を擁す家柄では収斂する

家臣をおいたりはしない。領民から厳しく重税を徴収する収斂の家臣がいるくらいなら、寧ろ、主家の財物をくすねる盗臣がいる方がましだ」、と。魯の家老の三桓のひとりである季氏は周王朝の立役者である周公より富んでいた。それなのに孔子の弟子で家宰（領地の取締役）をしていた冉有が、李氏に収斂してさらに富ませた。子曰く、「（冉有は）吾が徒に非ざるなり。小子（諸君）、鼓を鳴らしてこれを攻めて可なり」、と（先進第十一の十七）。富者への足し増しは断じて許されない。

●「国に二君非ず、民に両主無し。卒土の兆民、^主を以て主と為す。任ずる所の官司は、皆是れ王の臣なり」。出典は、「礼記」（曾子問篇）」に、「天に二日なく、土に二王なし」。「詩経」（小雅・北山）に、「溥天の下、王土に非ざるはなく、卒土の濱、王臣に非ざることなし」とあるによる。又、「春秋左氏伝（閔公元年）」に「天子に兆民、諸侯に万民という」、と。

●「何ぞ敢えて公と共に百姓に賦斂せんや」。名宰相で知られる齊の晏子が、齊侯に継室を納れんことを要請するために、晉に使節となって来た。婚約を済ませた饗宴の席で、晏子は晉の大夫・叔向に齊の現状について質問された。晏子曰く、「齊は今、季世（末世）である。よく分からないが、陳氏のものになるだろう。家量を以て貸して、公量以て之を収む、からだ。というのは、現在、我が齊国の量（ますめ）は、四升で一豆、四豆で一区、四区で一釜、十釜で一鐘と決められている。だが、陳氏の家量は、五升で一豆、五豆で一区、五区で一釜、十釜で一鐘。そして、陳氏の領地内では、民に貸す時は自家の大きな量で計って貸し、返す時は、公室の小さな量を使って返せばよい。山の材木や魚・塩・貝類も原価販売、民は労力の三分の二を公室に納め、三分の一を自分の衣食にあてている。一方、公室の国庫は余剰物が腐敗して虫が沸いているのに、長老たちは飢え凍え、国都では、「履（く＝普通の靴）は賤（安）くして踊（足きりの受刑者の履く義足）は貴（高）し」という有様だ。陳氏の民を愛すること父母の如く、之に帰すること流水の如し。民を獲ること無からんと欲するも、はたいずくんぞ之を避けん」、と。（「春秋左氏伝（昭公三年）」

十三に曰く、諸の官に任ずる者は、同じく職掌を知れ。或は病み、或は使いして、事を闕くことあらむ。然れども知るを得るの日は、和すること曾て識れるが如くせよ。其れ与り聞くに非ざるを以て、公務を防ぐこと勿れ。

●「諸の官に任ずる者は、同じく職掌を知れ。或は病み、或は使いして、事を闕くことあらむ」。諸々の役職に任命された者たちは、お互いの職務をよく理解しあっておくこと。何となれば、病気に罹ったり、公用などがあつて出張することが起こり、その間それぞれの職務を遂行できぬ場合があるからである、というもの。「晉書・樂志」に、「伯益は舜禹を左け山と川を職掌す」、と。「易経・繫辞上傳」に曰く、「君子は安くして危うきを忘れず。存して亡ぶるを忘れず。治まりて乱るるを忘れず」、と。

●「然れども知るを得るの日は、和すること曾て識れるが如くせよ」。「然れども知るを得

るの日」とは、担当の者が、療養或は使いして帰り、元の役職に戻ってお役目を職掌する場合には、の意。「和すること曾て識れるが如くせよ」とは、留守の間のことは、他人がやったことなので、我は知らずなどと責任逃れせず、以前から知っていたかの如く引継ぎを遺漏無く行っておけ、ということ。

●「其れ与り聞くに非ざるを以て、公務を防ぐこと勿れ」。我は預り存せず、など言い合って、お互いの意思疎通を欠き、職掌が疎漏し、公務の妨げが無きようにせよ、と。春秋時代の史官(歴史記録官)たちは、まさに本第十三条の亀鏡である。齊国が大政治家・晏子によって治世を謳歌する前の荘公時代、多淫な荘公が大夫の崔杼の夫人と密通し、それを怒った崔杼により暗殺された。この事件を齊の太史(担当の史官)が「崔杼その君を弑す」と記録した。崔杼は怒ってその太史を殺した。すると太史の弟があとをついで、同じく書いた。かくて犠牲者は二人。しかし、その弟の弟があとをつぎ、また同様に書いた。さすがに崔杼はあきらめざるを得ず、捨て置いた。一方太史がことごとく死せり、と聞いた地方在住の史官たちが、竹簡を執りもって駆けつけたが、「すでに書せりと聞き、すなわち還る」。誰か記録し終わったと聞いてそれぞれの任地に帰った、というのである。(「春秋左氏伝・襄公二十五年」)

十四に曰く、羣臣百寮、嫉妬有ることなかれ。我既に人を嫉まば、人も亦我を嫉む。嫉妬の患、其の極を知らず。所以に智己に勝されば則ち悦ばず、才己に優れば則ち嫉妬す。是を以て五百歳^{いまいま}の乃^{いま}今、賢に遭ふも、千載以て一聖を待ち難し。其れ賢聖を得ずんば、何を以てか国を治めむ。

●「羣臣百寮、嫉妬有ることなかれ。我既に人を嫉まば、人も亦我を嫉む。嫉妬の患、其の極を知らず」。嫉妬、則ち「ねたみ、そねみ」あるは人の世の常。屈原、名を平は、楚国の王族に生まれ、楚の懷王(前三二八年～二九九年)に仕えて左徒となった。博聞強記にして政治の沿革に詳しく、礼を知り、数々の国策を立案提起した。しかし、その才能を王が寵愛したのを上官大夫は嫉み、屈原はあらぬ讒言誹謗を繰り返し受け、王に疎んじられる羽目に陥った。時は諸侯合従連衡のまさに戦国の世。秦の派遣した張儀の老獪な策に踊らされ、再三屈辱に遭いながらも懷王は秦との交渉を断たず、遂に秦で客死した。次いで懷王の長子の頃襄王が即位すると、屈原と意見を異にする令尹一派に懷王客死の罪をきせられ、さらに遠地の揚子江南に左遷された。憔悴しきった屈原は、湘江のほとりをさ迷い、「懷沙の賦」を作り、汨羅(べきら)に身を投じた。彼の自伝的叙事詩「離騷」に曰く、

衆皆競い進んで以て貪婪に	人は皆先を争い利をむさぼり
憑(満)つれども求索するに厭かず。	十分に望みが適ってもまだ飽かず求める
ああ、内に己を恕して以て人を量り	ああ、彼らは自分の心で他人を推しはかり
各々心を興して嫉妬す	それぞれ身勝手な心を燃やし嫉妬しあっている

「嫉妬の患、其の極を知らず」。嫉妬による確執が政権の座を揺るがし、執政者の失脚・殺害は愚か、国を滅び至らしめた事例は枚挙に暇無い。「論語・衛靈公第十五の十四」に、子曰く、「臧文仲は其れ位を竊(盗)める者か。柳下惠の賢なるを知りて与に立たず」、と。魯の大夫で智者と言われた臧文仲でさえ、自分より優れている柳下惠に嫉妬して、上卿に推薦しなかった。嫉妬するな、というこの条を遵守するのは至難な業である。

- 「五百歳の乃今^{いま}、賢に遭ふも、千載以て一聖を待ち難し」。五百年後に賢人に遭い、千年待っても遭い難いのは聖人だ、という意味。「孟子・公孫丑下の十三」に、「五百年にして必ず王者興る」による。堯・舜から五百年後に殷の湯王、それから五百年後に周の文王、そしてそれから五百年後に孔子が世に出た、という。それ位
- 「其れ賢聖を得ずんば、何を以てか国を治めむ」。上述した如く、賢聖なる者は得がたいので、天下を治める者は、つまらぬ嫉妬を捨て、仏法僧をを敬い、古の賢聖の道を学び、一致協力して天下を治めよ、と言っているのであろう。

十五に曰く、私に背きて公に向かふは、是れ臣の道なり。凡そ人私有あれば必ず恨みあり。憾み有れば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を防ぐ。憾み起これば則ち制に違い法を害う。故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情^{こころ}なるかな。

- 「私に背きて公に向かふは、是れ臣の道なり」。「私に背きて公に向かふは」とは、官吏たる者は私心を去れ、公僕たるの本旨を忘れるな、ということ。
- 「凡そ人私有あれば必ず恨みあり。憾み有れば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を防ぐ。憾み起これば則ち制に違い法を害う」。詳細の説明を要しない事実であろう。私心有れば争心目覚め、恨心が興る。するとお互い非協同になり、私心が増幅し、中庸を得た公心興らず。結局違法行為を誘引する。故に、お互い仁・恕の心を以て政務に当たれ。顔淵、仁を問う。子曰く、「克己復礼仁と為す。一日己を克(せ)めて礼に復(かえ)れば、天下仁に帰す」(顔淵第十二の一)、と。そして克己の極功は、「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし」(子罕第九の四)の「四絶」を修練すること。恕とは、「己の欲せざる所は人に施すことなかれ」(顔淵第十二の二)。
- 「故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情^{こころ}なるかな」。初章は第一章のことで、「上和らぎ下睦び」、とある。上下和睦し和諧せよ。「易経・繫辞上傳」に曰く、「二人心を同じくすれば、其の利きこと金を断つ。同心の言は其の臭(かおり)蘭の如し」、と。執政者同士が、金をも断つ程の親密好合し、蘭の芳香を放つ善言以て善政に当たれ。

十六に曰く、民を使うに時を以てするは、古の良典なり。故に冬の月間有れば、以て民を使ふべし。春より秋に至るまでは農桑の節なり。民を使ふべからず。其れ農せずんば何を

か食はむ。桑せずんば何をか服す。

●「民を使うに時を以てするは、古の良典なり」。「古の良典」は「論語」。「子曰く、千乗の国を道びくに、事を敬して信、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす」(学而第一の五)。孔子が言うには、大国を治めるには、事業を慎重にして信頼され、無駄な費用を節約して人々を愛し、民を使役するには適当な時節にやらせることだ、と。「民を使うに時を以てする」は、蓋し名言である。「論語」以外にも使われた古言であろう。

●「故に冬の月間有れば、以て民を使ふべし。春より秋に至るまでは農桑の節なり。民を使ふべからず」。かつて宋の衡陽王が春月に狩をした。途中で老父が菅笠を被って耕しているのに出会った。王の左右の者たちが之を退けようとした。すると老父が曰く、「狩などをして遊び楽しむのは古人の戒めるところです。今、陽気まさに長ずる時節、一日耕さざれば我々農民は其の時を失ってしまいます。どうして禽獣などを追って楽しむ方々なぞの言うことに従って退いておられましょうぞ」、と。衡陽王、馬を止めて曰く「賢者なり」、と。臣下に命じて之に食を賜わんとした。老父辞退して曰く、「大王さまが農耕の時を奪わざれば、則ち境内の民は皆、大王の食に食べ飽きることでしょう。私だけがどうして独り大王の賜物を受ける必要がありますでしょうか」、と。衡陽王がその老人の名を問うたが、告げずして立ち去った。熊沢蕃山が「中庸小解」にも引用した佳話である。(「資治通鑑」(宋紀五・太祖文皇帝中の上・元嘉十六年))

●「其れ農せずんば何をか食はむ。桑せずんば何をか服す」。「孟子」(梁恵王篇)に曰く、「五畝の宅、これに樹(う)うるに桑を以てせば、五十の者以て帛(絹)を衣るべし。鶏豚狗彘(鶏、豚、犬)の畜(養)い、其の時を失うなくんば、七十の者以て肉を食うべし」、と。

十七に曰く、それ事は独り断^{きだ}むべからず。必ず衆と与に宜しく論^{あげつち}ふべし。少事は是れ軽し。必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ふに逮びては、若しくは失あらんことを疑ふ。故に衆と与に相弁^{きだ}めなば、辞則ち理を得む。

●「それ事は独り断^{きだ}むべからず」。「韓非子・孤憤篇」に、「今、大臣柄を執り独断して、しかも上収むることを知らずば、是れ人主の不明なるなり」、とある。勝手に大臣が政治の実権を握って、独断でものごとを決め、しかも君主がそれを制することができないようでは君主は愚昧である、というのである。韓非子は続いて、そんな状態は「死人と病をおなじくする者」や「亡国と事をおなじくする者」と変わらず、早晚存続してはいけない、と言った。「独断」は、「滅亡」の代名詞である。

●「必ず衆と与に宜しく論^{あげつち}ふべし」。「三人寄れば文殊の知恵」「子曰く、我三人行けば必ず我が師を得。其の善き者を択びてこれに従う。其の善からざる者にしてこれを改む」(述

而第七の二十一)。「舜は其れ大知なるかな。舜は問うことを好んで^言を察するを好む」(中庸)。衆と討議し、人の意見に耳を傾けなければならない。

●「大事を論ふに速びては、若しくは失あらんことを疑ふ。故に衆と与に相^{きだ}弁めなば、辞則ち理を得む」。鄭の国では、人々が郷校(村の学校)に集まって、政治談議をたたかわす習慣があった。然明という役人が、子産に、この風習を止めさせるために郷校を廃止すべきだと進言した。すると子産曰く、「何ぞ為さん。夫人(ひとびと)朝夕して退きて遊び、以て執政の善否を議す。其の善しとする所の者は、吾則ち之を行い、其の悪しとするところの者は、吾則ち之を改めん。是れ吾が師なり。どうして郷校を廃止できようか。吾聞きて之を藥とするにしかざるなり」、と。民の声は天の声。忠言は耳に逆らうこと多々あろうが、「是れ吾が師なり」「吾聞きて之を藥とするにしかざるなり」の大度量こそ憲法十七条を活かし、天下泰平の世を草創する為政者たる者の心構えであるべきなのだろう。